鏡

己以外の総てを映す鏡を部屋中に置き
俺は下界を眺める―――その毎日

御喋りを聞かされ続けることもなく
望みどおりではないか？

麻薬を嗅がせるためだけの知
そんなものが社会的要件になっている

無抵抗に小さな画面に吸い込まれ
無邪気にくすぐられるだけの屈辱

感染することによってのみ生を享け
普段は息を潜めている者ども

へし折られた虚栄を拾い集める
点々とつながって続いている

ただ、あてもなく逃亡する―――
自分が何を求めているのかさえ分からない

鏡の陰に隠れ、取り残される―――
望みどおりではないか？

性欲と物欲と虚栄―――
その３つのみで構成されている俺

自らを鏡に映した時に知るだろう―――
そのことを怖れている

ひたすら

怖れている

(2012.7.2)